Passing on the Traditions of the Hamamatsu Festival during the COVID-19 Pandemic: The case of Chitose-chō

Simon JOHN

Keywords: Tango-no-Sekku; Hamamatsu Festival; Kite-flying; Passing on traditions

Abstract

Held on May 3–5 during *Tango-no-Sekku*, now celebrated as Children's Day in Japan, the Hamamatsu Festival is the pre-eminent event in the annual calendar of one of Japan's largest cities, Hamamatsu, which lies in Shizuoka Prefecture. With a history of over 200 years, this festival celebrates the arrival of new-born babies into the world. Huge kites are flown into the sky to foretell bright futures for the babies. Re-organized and revived after the destruction of the Second World War as an optimistic symbol of recovery for industrial Hamamatsu, in 1948 around 50 "*chō*" or "towns" (more like "suburbs" or "localities") were part of the first postwar festival. While the basic framework is the same, each of these *chō* has its own "mini-festival" with peculiar traditions and customs passed down over the generations as well as within the associations to which members of the *chō* belong, particularly the "Kite-Flying Association." One of the original postwar participants was Chitose-chō, a central locality with a vibrant entertainment and hospitality industry. It is quite welcoming and invites non-Japanese Hamamatsu residents as well as some people from outside the city, such as the author, to participate in a kind of "foreign legion." The entire city comes to a stand-still during the festival, and there is a large tourism boost with total participation counted at 1–2 million spectators. Socio-cultural and demographic changes have led to several alterations in the conduct of the festival even as the towns continue to preserve many of the old traditions. The greatest of these modifications was the decisions by various towns to open up the

festival to celebrating not only the firstborn son, as was traditional, but also subsequent male progeny and even female progeny. The population decline and the availability of space and time are factors that led to these changes. While the festival had continued unbroken annually for over 60 years, the decision was made to cancel it in 2011 in the aftermath of the Great East Japan Earthquake disaster. Then, not even 10 years later, it was cancelled again in 2020 due to the COVID-19 pandemic and held in a limited format in 2021 (Chitose-chō chose not to participate) and with a slightly expanded format in 2022. Already under strong demographic pressure, each town has been finding it challenging to develop ways to pass on its traditions in the pandemic era. At a time when physical attendance was not possible, the author conducted a study remotely to see both how the additional, unpredictable, and constantly changing pressures of the pandemic have made this process even more difficult and how the local people aim to pass on their knowledge and skills despite these obstacles. The people of Chitose-chō are optimistic and say they will find a way even though they are strongly aware of the challenges.

コロナ禍における浜松まつりの伝承
―千歳町の事例に―

ジョン・サイモン

はじめに

静岡県浜松市には毎年５月３日～5日の３日間で「浜松まつり」が行われている。端午の節句にちなみ、生まれてきた子供のために大凧を揚げる様子が主な特徴である。この「まつり」の歴史には諸説があり、浜松市民の中の言い伝えとしては、室町時代から続いてきたことが通説であるが、近年その根拠となっていた史料の信憑性が疑問視されており、立証できる最古の文献は江戸中期のものであり、この時点で、端午の節句の時期に揚がった大凧があったとされている。「初子」という初めて生まれた男の子のために揚がる凧は「初凧」と呼ばれる。明治維新後、旧城下の町々に消防組ができ、これらが初凧の風習に糸切合戦を加え、これらの当時の人々の熱心さは現在まで続いている。現在でもまつりに関する町凧揚げ会の呼称が「○○組」となっていることはその名残である。第二次世界大戦により一時中断となったが、1948年には浜松市連合凧揚会主催で第１回の凧揚げ合戦が50余りの町で開催された。その２年後には、正式名称が「浜松まつり」と定められた[1)]。現在のまつりは近年期間中には200万人以上の人出があるとされている。

1)　浜松観光コンベンション課（編）、1996年、『浜松まつり』、浜松観光コンベンション課78頁；山崎源一、1983年、『凧と屋台』、樹林舎、25頁

この浜松まつりの特徴の一つは各町（町内会）による「ミニまつり」から全体の浜松まつりが構成されていることである。著者の調査地である千歳町は戦後再開した際の50余りの町の一つである。JR浜松駅・遠州鉄道新浜松駅付近の「街中」と呼ばれる地域の繁華街の一つでもあり、昼間に開店しているお店もあれば、多くの店は夜に栄えている。

端午の節句は、日本・韓国・中国・ベトナム等の漢字文化圏において、多様な形態で行われている。特に日本の場合では、「男児の節句」として、五月人形・菖蒲湯・鯉幟等の風習が全国に普及しており、これが現在の「こどもの日」につながっている。毎年4月から5月にかけて、日本中で風に吹かれている鯉幟が目につく。しかし、この時期には、もう一つの端午の節句の風習として、大凧揚げの大会が静岡県浜松市をはじめ、日本の各地で行われているということは、他の行事よりも知名度が低いであろう。日本では（新暦の）端午の節句は大型連休と重なっており、浜松市の他にも神奈川県相模原市・座間市、埼玉県春日部市、石川県内灘町、富山県射水市愛媛県内子町長崎県五島市、青森県弘前市、北海道札幌市が、5月5日やその前後に凧揚げ大会を行っている。5月上旬開催の凧揚げ大会は風吹の良さや連休に合わせたものであると思われがちであるが、滋賀県東近江市の八日市、新潟県新潟市白根地区・三条市・見附市今町地区・長岡市中之島地区では、他の大会の1ヵ月後の6月5日前後に開催されている[2)]。この時期は旧暦の端午の節句に相当するということから、日本各地では端午の節句と凧揚げが深く結びついていることがさらにわかる。

この端午の節句に行われている浜松まつりは、浜松市及び浜松市民が誇りに思っている年中行事の最大のものであるが、近年の浜松市の変遷などにより、まつりの形態も変わりつつある。行政と市民の「浜松まつり観」

2） 日本凧の会（編）、2019年、「全国凧揚げ大会日程」、『日本凧の会会報第98号 WINTER 2019』pp. 234-6

もそれぞれ立場により異なり、観光・伝承・国際化など多様な側面で内外関係について問われることが多い。現在の研究の主なテーマは「祭祀集団の持続と変容―端午の節句・浜松まつりを事例に―」であり、浜松まつりの一団体である千歳凧揚げ会をメインに、その中心である青年会をはじめとする様々な組織による伝統の引き継ぎについて調査している。この研究では、浜松市及び浜松市民が、浜松まつりをどのように外の人たちに見せており、また、どのように内だけのものにして、外の人たちから隠しているかという観点からでも検討していきたい。

町内会（凧揚げ会）毎に独特な歴史があり、それぞれの伝統を継承することとなっている。この町内会は地理的・歴史的かつ社会経済的な要素により、かなり異なる風習や伝統がある。例えば、研究対象の千歳町はお店が多い繁華街であるため、住民は少なく、凧揚げ会のメンバーにはお店の営業者とその顧客もよくみられる。

この町ではまつりの行い方（凧揚げの他に、御殿屋台回しや練り歩きなどの多様な要素）の伝統は時に変容を許しながらも継承して守ってきた。これは年配者から若者への伝承だけではなく、組織内の先輩から後輩への伝承も重要である。1970 年に浜松まつり本部が形成されて以来、浜松まつりは安定した年中行事となったが、ここ 10 数年間には大きな変動が見られた。まず、2011 年には震災後の自粛ムードにより戦後初めての中止となった。そして 2020 年には新型コロナウィルスの影響で完全中止となり、2021 年には一部開催（凧揚げのみ）を行ったが、参加するか否かは町内会（凧揚げ会）毎で決めることとなり、調査地の千歳町をはじめ、不参加を選んだ町内会が多かった。調査を行なった 2021 年 8 月の時点では 2022 年のまつりの形態については未定であった。2011 年にまつり本部から改変された新たの組織として生まれた「浜松まつり組織委員会」や各町内会は、今後どのように変化させるか、どのように行えるようにするかに

ついて対策を進め、結局2021年と異なった形態の一部開催となった。他の祭りでは伝承の問題を取り上げ、無理矢理に行う事例もみられるが、浜松まつりはかなり慎重な立ち位置を保っていると考えられる。

筆者は2000年より浜松まつりにほぼ毎年参加しており、様々な町内会でのまつりを体験してから、2013年に千歳町を調査地にし、その後は参与観察により、調査を続けている。町人ではないにもかかわらず、横浜より訪問を重ね、浜松まつりはもちろん、他にも千歳町の年中行事に参加している。部外者である筆者を仲間に入れていただいているが、関東の緊急事態宣言の発出などにより、訪問することができなくなり、町人との繋がりはSNSなどに限られていた時期が2年間半以上続いた。

この論文では、2011年の震災の年と最近のコロナ禍の時期の比較も含め、この浜松市における一大事な年中行事がないことに対する市民の精神的な状態に触れながら、まつりが行われていないことで、どのように過ごしているか、どのように伝承していくか、そして、どのようにこの危機を乗り越えるかについて考えたい。

オンラインの聞き書きにより、事例を述べるとともに、全体研究のテーマである「持続と変容」がどのようになっているかについて、または、大きな変化が生じる中で伝承の重要性について論じたいと思う。

1　浜松まつりと千歳町の概要

1. 1　浜松まつりの概要

第二次世界大戦により一時中断となったが、1948年には浜松市連合凧揚会主催で第1回の凧揚げ合戦が50余りの町で開催された。その2年後には、正式名称が「浜松まつり」と定められた[3)]。1948年の時点では、

3)　浜松観光コンベンション課（編）、1996年、『浜松まつり』、浜松観光コンベンション課　78

現在に至るまつりの３本柱が形成されていた。

１本目の柱は、昼間の凧揚げ大会であり、毎年５月３日～5日の間に中田島の遠州灘海浜公園の球技場に特別会場（通称：凧場）が設置されている。長男の誕生を祝うためのものであり、町の固有の町紋（凧印）とともに、以前の１年間に生まれた長男の名前が、6～10畳の面積の紙が貼られた大凧に記してあり、これが良く揚がると縁起が良いと言い伝えられている。その子供は「初子」と呼ばれ、浜松まつりの主役である。凧を揚げるために、高い技術を持つ操縦士の後ろに、5人～20人が輪になり力を出し合い、正式に定められている糸（綱）を引っ張ったり、延ばしたりする。リズムを作るための太鼓・ラッパの音楽と「オイショ」、「ヤイショ」といった掛け声も独特である。各町には「ラッパ隊」と呼ばれる小学生から高校生くらいの歳の少年・少女達が参加している（大人たちも混じって参加する場合もある）。凧がよく揚がると、他の町との凧合戦が行われ、凧場の周りに屋台も多く出ており、飲食も盛んである。各町において、凧場の横の定められた場所に凧を保管するための「陣屋」を建て、それが３日間、町人の本拠地となる。近年では、少子化や男女平等が考慮され、長男以外の男児・女児も祝福されるようになった。この現象は近代日本の子供への平等にも由来し、長男であれ、三男であれ、公平な扱いをすることが主流となる。「初子」という名称はすなわち「初節句を迎える子供」の略となっている。初子祝いを行うには膨大なお金の投資が必要であり、まつりのためにローンを組む家族もいると聞いている。そして、長男でも「初節句」ではなく、成長段階を考慮し、一年遅れで祝福されることもあり、出資緩和のため、長男・次男、長女・長男を同時に祝ってもらう家庭もいる。また、高齢化により、凧揚げの技術を保持し、伝承することができる人が減っているとの声もある。その他に、凧の数が増えたことにより、面白い

頁：山崎源一、1983年、『凧と屋台』、樹林舎、25頁

技ができなくなってきたという苦情もある。

この昼の行事の他に、夜には「初練り」と「御殿屋台引き回し」が行われる。これもその町の初子や町内の店の繁盛を願うためとなっている。夕方には駅周辺で様々な町が合同で行う「市中練り」が観光用で行われており、あるホテルでは隣接している町をそれぞれ招き、順番に練ってもらうが、町内で行われる練りは基本的に内型まつりである。つまり、昼間にはそれぞれの町の人々が集まり競り合うが、夜になると、各町に別々のまつり・祝いが行われることとなる。その町の規模・幹部・町民の参加度等により、行い方に差異が出てくる。町内練りの基本的な特徴は町紋が付いた法被と提灯でラッパ隊とともに、前述の「オイショ」、「ヤイショ」といった掛け声を交互にかけながら、練り歩くこと、数ヶ所の「初」と呼ばれる初子の自宅で「万歳三唱」をすること、その「お返し」として御馳走されることである。飲酒をすることも、樽から日本酒を振り撒くこともしばしば見られる。市中合同練りの日であると、5時間ぐらい歩き回ることになる。

3本目の柱である「御殿屋台引き回し」は豪華な屋台を見せることだけではなく、屋台の中に「お囃子隊」が様々な楽器を演奏しながら、歌を唄うこととなる。この「お囃子隊」はだいたい小学生頃の女性がメインであるが、各町の状況により構成が異なっている。屋台には各町を表彰する飾りや彫りものが特徴であり、町人が「街中」と呼ばれている市街中まで手動で引っ張り、移動させ、決まった順路で動いてからまた町へ戻すこととなる。引っ張っている人たちも前述の通り交互に掛け声をする。

浜松まつりは、戦後に再開した頃から行政が主導するようになり、戦後復興のシンボルから、浜松市の観光行事として急激に拡大した。1970年に自主的な管理組織であった連合青年団統監部が解散させられ、浜松市・観光協会・商工会議所・自治会連合会からなる浜松まつり本部が新たに組

織され、観光資源の側面を強化した。長い間、市内中心部の 67 ヶ町のみにより行われていたまつりが、行政の後押しにより 1975 年以降は参加町の数が段々と増え、僅か 30 年間で 107 ヶ町も増加した。2019 年では、参加町数は 174 であった。これにより参加者が激増し、全国でも屈指の人出数を誇る行事となった。総人出数は 210 万人であり、前年の 2018 年の 177 万人よりさらに増えた。（2010 年より発表されている累計は毎年約 170 万人である。）登録者が法被につける「ワッペン」の数は例年同様の 12 万枚が販売された[4)]。あくまでも累計であり、重複しているところはあるが、浜松まつりの観光客を招く力がよくわかる統計である。

しかし参加する町の約 7 割が古い伝統をあまり知らないため、まつりの意義・形態が大きく変化したとの声もある。ちなみに、浜松まつり本部結成頃まで、まつりは 5 月 1 日～5 日の 5 日間であり、市中練り・市中御殿屋台引き回しは 3 日～5 日の 3 日間のみ行われていた。また、最初の 2 日間は町内のみで、当時は殆どの組が 3 日間とも市中練り・市中御殿屋台引き回しに出ていた。近年では、参加町が多過ぎるため、市中練り・市中御殿屋台引き回しは交代制であり、1 日・2 日のみ参加する町が多い。老人の話によると、その当時のまつりはもっと乱暴であり、凧場などで凧合戦の情熱から町同士の喧嘩も珍しくなかったが、本部ができてからは、観光客の安全やまつりのイメージ等を考慮し、これが徐々に消えてきたそうである。近年、凧場での警察の存在も強化されているが、組織委員会下の「企画統制監理部（統監部）」が場内警備を行なっている。

観光客を招くため、浜松市は、浜松まつりとちなんだ様々な行事を行っている。しかし、山田有一氏が、2007 年の時点では観光客の数が減少していたように見え、特にバスの団体客が市内の宿に泊まらず、付近の温泉

4)　浜松商工会議所「2019 年度事業報告書」、公益財団法人 浜松・浜名湖ツーリズムビューロー（旧公益財団法人浜松観光コンベンションビューロー）による統計

地に宿泊しているとの見解を述べている[5)]。このことから、まつりの観光イベントとしての経済効果も減少していることがわかる。

浜松まつりは多様な理由から市民のためのまつりであるといえる。まず大きな特徴は、漢字表記の「祭り」ではなく、平仮名表記の「まつり」という名が戦争直後より使われている。日本の祭りは従来神々を楽しませるためにあり、「祀り」と「神道」との関わりが強い事例がよくあるが、浜松まつりは特定の宗教的な祭礼とはあまり関係がないため、「都市まつり」というジャンルに区分される。さらに、200年以上の歴史を考えると、「都市まつり」の中でも、かなり長い伝統を持つまつりであるといえるのである。

このように考えれば、他に中国より伝来してきた「節句」に基づいた宮城県仙台市や神奈川県平塚市などの七夕祭りも似ている要素が多い。しかし、七夕伝説の織姫と彦星のような「主人公」がおらず、子供とその家族が中心となっている。

浜松まつりと並ぶ有名な都市まつりのリストを挙げれば、福岡県博多どんたく、高知県YOSAKOIソーラン祭り、東京都浅草サンバカーニバル、広島県ひろしまフラワーフェスティバルなど多々あるが、それよりも多いのが小規模のものである。筆者が住んでいる神奈川県の事例をあげると、かわさき市民祭り・藤沢市民祭り・大和市民祭り等がある。

自動車産業等の大企業もあることから、昔の城下町は、現在では「企業城下町」となった。浜松市は、平成市町村大合併の一環として、2005年7月1日に全11市町村を編入し、2007年4月1日に政令指定都市へ移行した。現時点では編入した地域はまつりに参加していないが、凧場の面積が既に限られているため、参加するようになると大きな問題となるだろう。実のところ、近年参加する町が多過ぎるため、陣屋を近くの砂丘に設置さ

5) 山田有一、2007年、『動 粋 静 浜松まつり』樹林舎

せられる町もある。山田有一が合併した当時に新地区の町の参加について考慮するようにと訴えた[6]。しかし、15年後の現在、旧浜松市以外の町の参加は未だにない。技術を伝えることも難しく、近くの町で参加を希望する町は浜松市の行い方を見習う期間が必要だと言われており、浜松まつりの委員会の規定の条件を満たさなければ参加することが不可能である。とはいえ、旧浜北市（現浜北区）には既に5月末の週末に凧揚げの側面もある「遠州浜北飛竜まつり」の伝統があり、浜松まつりに加わることはないと思われる。

1. 2　千歳町・千歳町凧揚げ会の概要

2013年より調査地としている千歳町はJR浜松駅・遠州鉄道新浜松駅付近の「街中」と呼ばれる地域の繁華街の一つであり、昼間に開店しているお店もあれば、多くの店は夜に栄えている。お店により、フィリピン人などの店員もいるため、かなり多様性のある町と考えられる。しかし、飲食店を含む商業地区であるため、住民がそもそも少なく、少子高齢化等の様々な理由でさらに減少している。この特徴から、凧揚げ会への参加人数は限られており、住民以外の参加率が高い町である。

千歳町の凧印は天狗の絵であり、凧揚げ会の組織は自称「天狗連」となっている。これは千歳町の氏神神社である1300年の歴史を誇る松尾神社には天狗が祀られていることが由来である。千歳町も毎年4月30日に凧や組員のお祓いを行なっている以外、浜松まつりに関しては神社との関わりが殆どないが、筆者を含め、青年会とその周辺のメンバーで6月に「松尾神社例大祭」という氏神祭に参加している。

この千歳町の一番大きな組織は千歳町自治会というもので、その自治会の下、20歳～45歳前後の人々は「青年会」に所属し、45歳以上の人々は

6）山田、2007年、132頁

「千歳会」という組織に所属する。これと別に「婦人会」も存在する。この組織のそれぞれの役員が7月～6月で決まっており、毎年の1月の新年会で「凧揚げ会」が発足される。この凧揚げ会の「執行部」には「青ダスキー」をする権利があり、それ以外は「赤ダスきー」をすることとなる。タコ場では「青ダスキー」をしている者のみが凧場で多町とやりとりができる決まりである。凧揚げ会が発足された際には「組長」と「筆頭」が決まる。例外はあるが、その年度の青年会の「会長」が組長となり、時期会長とされる者が筆頭となる風習がある。この役員たち以外に、凧揚げ会の一般参加もあり、凧場に出るためには千歳町の印が付いている法被と登録の証として千歳町が発行したワッペンが必要である。

千歳町の凧揚げ会のもう一つの特徴はこの一般参加者の中に筆者も含む外国人の参加者が多く、非公式の「外人部隊」が存在する。これはバブル期にあるバーのアルバイトや顧客がスタートであったが、近年の隊員は男女問わず市内在住の英語圏出身の英語講師やその関係者である。したがって、この「外人部隊」の中に他所の町に住んでいる日本人も含まれている。この外人部隊はよくマスコミの取材を受けることもあり、千歳町凧揚げ会の受け入れる姿勢がこの町を調査地に選んだ理由の一つである。

2　研究方法

筆者が住んでいる横浜市の緊急事態宣言が続き、8月には浜松市に緊急事態宣言が発令された。2年間以上浜松市を訪問することができておらず、困っていた。この新時代には調査に新しい方法が必要となる。町人とはSNSなどでコミュニケーションを継続し、状況の進捗を遠くから確認していた。しかし、「コロナ禍」という状態が予想よりも継続し、時間に連れ、まつりの継承問題として大きなテーマとなった。このテーマを取り扱

うと考えると聞き書きとなるが、浜松を訪問し、聞き書きを行うことができずにいたため、オンライン会議アプリの Zoom を利用してインタビューを行うことにした。Zoom は録画機能もあり、記録するためには有利な方法ではあるが、遠隔のインタビューでは電波障害などにより、どちらかがフリーズしたりすることは多々あった。2021 年 8 月 14 日から 9 月 12 日までの約 1 ヶ月間、浜松市中区千歳町関係者の全 8 組・9 名とインタビューを行った。このインタビューの対象者はそれぞれ異なる立場で千歳町の浜松まつりに参加しているため、可能な限りに多様な観点からの意見を集めた。

インタビューの日時と対象者は以下の通りである。

2021-08-14 09.31.06 A 氏（2019 年度の組長）

2021-08-17 18.04.57 B 氏（2011 年度・2012 年度の組長、2022 年度また組長になる予定）

2021-08-19 13.00.59 C 氏（祭り用具店を経営、組長経験あり）

2021-08-19 15.01.54 D 氏（C 氏の弟、組長経験あり）

2021-08-27 18.16.38 E 氏（オーストラリア人参加者、男性、「外人部隊」のリーダー的存在）

2021-09-07 19.19.04 F 氏（2020 年度・2021 年度の 2 年間の組長、以前にも組長経験あり）

2021-09-09 20.17.21 G 氏（アメリカ人参加者、女性、「外人部隊」の隊員）

2021-09-12 10.29.25 H 氏・I 氏（夫婦、町外に住んでいるが、H 氏は凧揚げ会のメンバー）

このインタービューではコロナ禍の質問に限らず、まつり全体のことを取り扱ったが、この論文では、中止になった年（2011 年、2020 年、2021 年）とその後に焦点を当てる。この分析を行った 2022 年 5 月現在になる

と、さらにコロナ禍の問題が増え、状況が変化したこともあったが、インタビュー対象者の語りはその現在のものである。2021 年 8 月というのは浜松にとってコロナ禍で最低の時期であった。翌年にまつりが行われるかどうかは決まっておらず、浜松市民はまつりについてのこと以上の不安を抱えていたのであろう。しかし、まつり好きな都市であり、千歳町関連者は Zoom を初めて使用する方が大半であったにも関わらず、聞き書きを快諾してくれた。

なお、匿名にはしているが、身分を明記したため、誰のことかは調べずにすぐ特定することができる。このことを考慮し、分析した際で引用をしようしても誰が何を言ったかの指摘をなるべく避けることにした。

3　2011 年―東日本震災による戦後初のまつり中止―

3. 1　中止に至る経緯

2011 年 3 月 11 日の 14：03 に東日本大震災が起き、その翌日に渡り、津波や福島第一原発の事件が起こり、被害が増え、全国的に波紋が広がった。すぐに自粛モードが始まり、浜松も被災地への想いを寄せたこととなった。この中で、戦後以来一度も中止されることなく毎年開催されてきた浜松まつりが、2011 年東日本大震災の被害者を考慮して中止になったということは、戦後史上最大の出来事であった。1995 年 1 月に起きた阪神・淡路大震災の年はそのまま実行したのであるが、東日本大震災は 3 月に起こり、その直後に判断が必要であったため、その時期の「自粛ムード」のために、中止することは「やむを得ない決定」であったとされるが、浜松市民の中では賛否両論である。

中止になったにもかかわらず、筆者は 2011 年の連休に浜松に訪問し、戦後初となる「まつりのない連休」をみてきた。「浜松まつり会館」とい

う博物館の担当者や一般市民に、まつりとその一時的な中止について聞き取りを行った。例年、まつり期間中の浜松駅は、町の提灯や幟によって豪華であり、多彩かつ賑やかな場となっていたが、2011 年は平日並みではないものの、普通の「日曜・祝日」のようであった。人混みは多少あったが、音と色は欠けていた。5 月に入ったら自粛ムードが緩和され、日本全国を盛り上げようとの運動が流行していたが、連休にはまつりの代わりのイベントは行うことはなかった。しかし、駅の北側に市場があり、義援金を集める活動が行われていた。経済効果の高いまつりが中止となったことによる影響は大きかったと思うが、「浜松の人は皆理解していますよ。」と、あるタクシーの運転手は言っていた。

連休の頃には、年内に小規模の代替のまつりが行われるという噂も流れていたが、まつり会館によると行わないとのことであった。浜松市民に尋ねると、「寂しいは寂しいですけど、来年こそ、盛大にやりますよ」というような答えが多かった。

駅の観光案内所に行けば、店頭に「今年は中止だが、まつり会館へ行けば、体験できる」とのポスターもあったが、やはり会館の入館者数は減った。会館によると、3 日間での入館者数は、例年の 1720 名と比べて 1159 名のみであったという。凧場は立入禁止となっていたが、風があまり吹かなかった 5 月 3 日には、会館の外や凧場側の砂丘で小さい凧を揚げたり、声を掛けたりする人々も見受けられた。

しかし、この時期にはまだ千歳町を調査地にしておらず、当時の千歳町の関係者の気持ちについて訊いたのは 2021 年 8 月であった。

3. 2　千歳町の中止に関する気持ち

2022 年 8 月の調査の中でもやはり賛否両論であったが、中止への反対意見が多かった。意外と最も納得いっていたのはオーストラリア人であっ

た（アメリカ人はその当時浜松に住んでおらず、この部分についての聞き書きを省いている）。「まつりができなかったことは悲しかったけど、浜松の人たちが FUKUSHIMA や東北の人たちへ想い、やむを得なかったとおもう。」という意見に対して、日本人からは浜松市長の発言を指摘した。（今でも現職の）市長が早期の段階に「中止する」という発言をしたことにより、主催者には中止を決めることしかなかったという。千歳町の関連者も青年会として前述の義援金の集金活動に積極的に参加したと聞いたが、それ以外は珍しく家で大人しく過ごしたとの声が多かった。

3. 3　翌年のまつり

2012 年、筆者は再び浜松まつりに行ってみた。再開した浜松まつりの雰囲気は震災前の祭り期間とは多少控え目であった。新幹線から降車し、改札を出ると、2011 年と同様に駅の町紋の幟等、まつり系の飾りがなかった。人混みも 2011 年よりあったが、例年並みではなく、法被姿も比較的少なかった。これをみると、JR をはじめとする集客するためにまつりを盛大に宣伝していた企業が危機管理の面から、ある場所に多勢の人を集めることに関する抵抗を抱いてきたようである。それ以来、駅広場の飾りは小さい公式幟のみで、駅外の飾りと差がなくなっている。この行政・企業による危機管理をはじめとする控えめモードに対し、一般市民は前年の中止を巻き返し、盛り上げるムードであった。

主な会場である「凧場」が海辺に位置していることから、浜松市や浜松まつり組織委員会も危機管理に関して考えさせられたのであろう。2012 年 4 月公式サイトに「凧揚げ合戦中に地震が起きたら」という 1 枚の pdf ポスターが発表され、同じポスターが公式ガイドブックにも載っていた。震災・津波への心配は明確である。津波を考慮し、新たな会場が検討中であるが、適地はまだ見つからない状況であることもポスターに書いてあっ

た。しかし、最終的には新しい防波堤の建設が決まり、2012 年から凧場の南（海）側にあった代表的な松林が伐採された。2012 年に始まり、全 17.5 km の建設が 2020 年 3 月に完成された。

しかし、逆に 2011 年の中止により、2 年間分の凧を揚げることとなり、しかも、初日は午前雨で午後風が吹かないということにより、特別許可で凧揚げの時間を延長した町もあった。各町内の「お初」の数も増えたため、市中練りに参加しなかった町もあった。これを機に街中にあった有料回覧席の設置を取りやめた。この理由も危機管理の面もあるかもしれないが、市中練りは例年並みの賑やかさがあったため、経済効果が程々にあったと言える。

観光向けの市中練りを避け、凧揚げと町内練りを重視したことも、町民にとって、外部的な様子よりも内面的な様子の方が重要であることがよくわかる。しかし、浜松市の傘下であり、浜松市より補助金をもらう限り、この「脱観光化」運動には無理があると浜松市の関係者が語った。

2021 年の取材した千歳町の関連者からも 2012 年には昨年の分も盛り上げる気持ちもあれば、運営を行なっている側としては「忙しかった」というイメージもよくあって、2 年分の「お初」をちゃんと祝ってあげることへ対する「責任」を感じていた。当時の組長は直前に事故で怪我をするハプニングもあり、本人からは「恥ずかしい」という話であり、周りの人は「普段よりやることが多かった。」のような声がほとんどであった。唯一その時に運営に携わっておらず盛り上げ好きのオーストラリア人話者は「楽しかった。前の年の分を楽しむ責任があった。」ということなった責任感を持ったという。しかし、その年を境目にいわゆる「外人部隊」の参加どが強まった。2011 年の外国人による日本離れに対して、残った人々や新たに来た人々にとって祭りが重要であったかもしれない。

4　2020 年・2021 年 コロナ禍　2 度目の中止・制限された開催

4. 1　2020 年・2021 年の浜松まつりの概要

2020 年の新型コロナウィルス感染症のパンデミックの影響は世界中に及んだ歴史的な出来事であるが、2020 年前半には「まだ何が起きているかはっきりわからなかった。」（話者語り）という気持ちがまだ強かった。その「コロナ渦」の初期、浜松まつりの好きな人たちにとっては、行うかどうかという話が広まっていた。結局、感染対策に伴い、数ヶ月の検討の末、3 月 23 日に浜松まつりの中止が発表された。

2020.03.23『令和 2 年度浜松まつり中止について』

平素より浜松まつりの開催にご理解、ご尽力を賜り、心から感謝申し上げます。

新型コロナウイルスの感染症により重篤化し、お亡くなりになった方々には、心よりご冥福お祈りするとともに、一日も早い終息を願うばかりです。

「令和 2 年度浜松まつり」は令和 2 年 5 月 3 日（日・祝）4 日（月・祝）5 日（火・祝）を予定しておりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、「令和 2 年度浜松まつりに関わるすべての催しの中止する」ことを決定いたしました。

組織委員会一同、開催に向けて準備をして参りましたが、みなさまの健康と安全を第一と考え、苦渋の決断をせざるを得ない状況となりました。

「令和 2 年度浜松まつりに関わるすべての催しを中止する」ことのご報告とともに、楽しみにされていた皆さま、関係者の皆さまには多大なご迷惑をおかけいたしますが、ご理解のほどよろしくお願いいたし

ます。

今後とも、浜松まつりをどうぞよろしくお願い申し上げます。

https://hamamatsu-daisuki.net/matsuri/news/2020/03/post-16.html

震災の際には決定が早過ぎて5月の自粛ムード緩和を見込めなかったが、後見すれば、2020年は5月になっても収束の目処はなく、まつりの開催は不可能であった。その当時は静岡県に緊急事態が初めて発令されていた。逆に「早く決定してください。」という声が多かった。繁華街の千歳町はこの「コロナ渦」がかなり大変な状況を及んだが、さらにまつりの中止は経済的にダメージを与えられた。特に震災の時の連休では、外に動くことが可能であったが、今回は浜松市民が自宅待機で、精神的な影響がより強かった。帰省組も帰省できず、例年の同窓会は遠隔で行うこととなった。筆者も2010年以来初めて連休に浜松に訪問することがなく、調査が一時的に遠隔で行うこととなった。2012年同様に来年は盛大に行いたいという声も多かったが、新型コロナウィルス感染症対策を踏まえたいわゆる「ウィズコロナ」の時代でのまつりの行い方について様々な課題が見受けられた。

この2020年から現在に至り、浜松市と筆者が滞在する横浜市には以下の状況が続いていた。

2020年4月7日–2020年5月25日　神奈川県では緊急事態宣言の発令

2020年4月16日–2020年5月14日　静岡県では緊急事態宣言の発令

2021年1月8日–2021年3月21日　神奈川県では緊急事態宣言の発令

2021年4月20日–2021年8月1日　神奈川県横浜市ではまん延防止等重点措置

2021年4月25日–2021年6月20日　東京都では緊急事態宣言の発令

2021年8月2日–2021年9月30日　神奈川県では緊急事態宣言の発令

2021年8月8日–2021年8月19日　静岡県浜松市ではまん延防止等重点措置

2021年8月20日–2021年9月30日　静岡県では緊急事態宣言の発令

2022年1月21日–2022年2月13日　神奈川県横浜市ではまん延防止等重点措置

2022年1月27日–2022年2月20日　静岡県浜松市ではまん延防止等重点措置

つまり、2021年になっても、「コロナ禍」というものがまだ続いていた。しかし、2021年1月には「皆様の安全を確保した上で、規模を縮小して開催し、浜松まつりの伝統を絶やさぬようにしたいと考えております。」という発表があり、当初では3日間から5日間に延長する計画であった。そして、「浜松市の感染状況が国の警戒ステージⅡ相当以下の場合は、「昼間の凧揚げのみ」とし、糸切り合戦はせず、1日当たりの参加町数を制限し、関係者のみの参加とする分散型での開催といたします。」と綴った。考えは「(まつり)の起源といわれている子どもの誕生を祝い、そして健やかな成長を願う凧揚げの伝統と技術を次の世代につなげていける」ために行うとしていたが、「参加に当たってのルールづくりやその周知徹底など感染症対策をしっかり施し、開催に向けて引き続き努めてまいります。また長い間まつりに携わる者といたしましても、何卒、決定の主旨をご理解いただきますようお願い申し上げます。」というアピールがあったから考えると賛否両論が予測される決定であることがわかる[7)]。この後に各町の凧揚げ会毎で参加するかどうかを判断することになり、結局「参加町は100町となったため、5日間への延長を中止とし、従来の5月3日～5日

7)　令和3年度浜松まつりについて〈ご案内〉https://hamamatsu-daisuki.net/matsuri/news/2021/01/3.html (2021. 01. 22)

開催へと変更した。」と発表された[8]。その間に調査地の千歳町の凧揚げ会が参加しないことを決意した。それでも 2011 年と同様、浜松市の様子を観に行こうとしていた。しかし、4 月 23 日に緊急の発表があった。

東京都、大阪府、京都府、兵庫県に緊急事態宣言が発令される見込みであることを踏まえ、本日、緊急に役員会を開催し、開催内容の変更が報告された。5 月 3 日～5 日の開催期間のうち、4 日と 5 日の 2 日間は、13 時から 15 時までの午後の部を取りやめ 10 時から 12 時までの午前の部のみとし、開催時間を短縮することとした。また、緊急事態宣言が発令された地域からの参加を禁止することとし、併せて感染対策のさらなる周知徹底を図るよう、参加各町に指示をした。浜松市の感染状況が、国が示す警戒ステージⅢに至っていないこと、またオリンピック・パラリンピックの開催状況、全国的な感染状況によって、中止となる場合があることといった開催基準等については変更なかった。当日は、検温所を設け、その他の出入り口については封鎖し、関係者以外の立入りを禁止することを強調した[9]。

これにより、筆者の滞在している神奈川県が対象外であっても、自粛を選択し、浜松まつりに参加して以来、初めて 2 年連続の不参加となった。

2021 年 5 月 3 日～5 日に浜松まつり凧揚げのみ開催したが、千歳町の凧揚げ会は参加しなかった。2021 年 5 月 12 日に国会議員が禁止中の東京から参加したことの報道があった。そして、2022 年には浜松まつりはまた制限された形で行われたものの、前年ほどの制限ではなく、凧場では、観客も上限 3 万人で認められていた。今回、千歳町も参加した。しかし、この開催するという発表は 2022 年 3 月 25 日にあり、その半年前の 2021 年

8）　令和 3 年度浜松まつりについて〈ご案内〉https://hamamatsu-daisuki.net/matsuri/news/2021/04/30405.html（2021. 04. 05）
9）　令和 3 年度浜松まつりについて〈ご案内〉https://hamamatsu-daisuki.net/matsuri/news/2021/04/30423.html（2021. 04. 23）

8月にオンライン聞き書きを行なった際、浜松市も緊急事態下であり、「コロナ渦」というものには慣れてきたが、翌年に行うかどうかは誰もわからなかった。

4. 2　コロナ禍の中止・不参加による気持ち

2020年の中止については誰もが納得した。参加ができないことあるいは運営側として開催ができないことについて悔しい気持ちが強かった人が多かったが、2011年の時とは「次元が違う」のような声も多かった。2021年のまつりには千歳町が参加しなかったことに対し、運営側が決めたことであったため、納得していたことが当然ではあるが、参加される側も「千歳町の凧揚げ会がそのように決めたなら、悔しいは悔しいけど、尊重するしかないです。」のような話があり、「私もこの形で参加したくないと思います。」という声もあった。しかし、まつり以上の問題を抱えていたのも事実である。「千歳はゴーストタウンだよ」と言われた。2021年8月の緊急事態宣言下の浜松にとっては当然なことではあるが、「連休の時もそうだった。」と聞いた。飲食街や娯楽街である千歳町には時短営業が効かず、休業した店が多かった。

4. 3　まつり期間をどのように過ごしていたか

2020年に関しては、緊急事態宣言下であったため、全員はステイホームの状態となっていた。「連休をゆっくり家族と過ごしたのは震災の年以来だった」という声もあり、「趣味を始めた」と語ってくれた話者もいた。しかし、2021年の際にも全員が「ステイホーム」を選んだ。この場合はまだデルタ株の恐ろしさに出会っていなかった頃であっても、2年連続のゆっくりとした連休を選んだ。他の町に混じって、凧場に行くことが可能であったと指摘したら、運営側も一般参加側も「千歳町が参加しないなら

私は絶対に参加しない。」などと返答した。平日は「コロナ渦」の中で仕事をこなし、大変な日々を送っていたため、普通に休めたことが新鮮だったとの声もあった。上述の通り、千歳町が中途半端の参加を拒否したなら、私たちも拒否するという気持ちが強かった。しかし、この「まつりがない連休」には慣れてきている人が多いのではという声もあり、いずれ再開が出来たとしても、以前のやる気を起こせない人も出てくるとの指摘があった。

筆者も、2020 年 7 月に長男が生まれたため、従来なら 2021 年に初節句を祝ってもらったはずであったが、ステイホーム生活中の横浜で「関東の伝統的な初節句の迎え方」になってしまった。これに対して、不安の最中にも関わらず、「今度は千歳で祝ってあげなきゃ」という話者が多く、いい気持ちになれた。しかし、これが実現されるかどうかは現在でも未定である。

4. 4　どのように伝承していくか

以前からの千歳町の危機感を抱いていた人にとってはコロナがそんなに関係なく、少子化など町の変遷の影響による伝承の問題が大きいと指摘されたが、楽観的な考え方を持つ話者もいた。「2、3 年だけじゃ、この長い間に築いてきた伝統だからすぐに消えはしない」などの意見があった。しかし、継承が重要な問題であることは誰も認めていた。その中で、「線引きをした方がいい。屋台はやった方がいいと思うんだ。」のような意見があり、なぜ特に屋台をやる意味があるかを追求したら、お囃子の伝承が肝心という指摘があった。「小学生にとって、2 年間の長さは大人より随分大きい。先輩から後輩へ継いでいけなくなってしまう。」と言われた。それに、線引きの話については、「今まで必須だったけど、今の時期でできないことはよしとして、またできる時にしよう」という項目があり、最初

は継承のための最低限のことについて専念することを強調した。しかし、2021 年のような中途半端な開催では、参加はしないことを表明した。その場合であれば、継承のために、千歳町が本当のまつりとは別の措置をとる必要があると言われた。

4. 5　どのようにこの危機を乗り越えるか

話者にとってもこの問題に気にする人が多かった。「コロナ前は不都合のところの微修正を行っただけだったけど、このギャップがあって、それだけじゃ済まない。集まること自体が拒否反応を起こしている。しかも千歳の場合はタスキー（役員）が割と高齢者なので…若い子だけで回せないまつりなので、若い子がやりたいと言っても上が「嫌だ」と言ったら、できることが分断されちゃう。完全に終わるかどうかわからないから何とも言えないよね。」との発言があった。そして、ワクチンへの期待よりも、「特効薬ができることを願うしかないよね。」のような発言は何人かの話者から聞いた。特に「練り」は禁酒かつソーシャルディスタンスであれば、無理があるという話が多かったが、これに関しては継承問題が特にないとの指摘があった。

上述の「別の措置」と関連することではあるが、実は千歳町の凧揚げ会が 2021 年にお囃子の演奏会を計画していたが、結局蔓延防止になったことで、次の年に「お預け」としたと語った。それで 2022 年にはまつりをやるかやらないかを別として、伝承のために限られた参加者の演奏会を行うかもしれないという話があった。このような工夫をする必要があるかもしれないが、千歳町でのまつりの存続については努力した上で継承していく覚悟を話者から感じた。

4. 6　2022 年以降：千歳町の今後の課題

この聞き書きを行なった際にはまだ「オミクロン」という言葉は誰も聞いておらず、「デルタ」が流行していた時期であったが、予想されていたことはだいたい 2022 年のまつりで実現された。ワクチン接種の普及により、2022 年の浜松まつりについて 3 月 25 日に発表があり、「凧揚げを有観客、夜の町内個別行動は町内屋台引き回しのみ」となり、「練り」は禁止とされ、凧場での観客としての来場者に 3 万人の上限がつけられた[10]。千歳町は今回賛同し、一般参加をなしに役員のみで開催することが決まった。2022 年の縮小開催は 2021 年の一部開催の教訓に基づいて行われるものとされていたため、2023 年以降の浜松まつりについては元の形式に戻れるかどうかは不明である。千歳町が参加した理由は 2021 年ほどの制限ではなかったためである。実際にあったかどうかはともかく、2021 年に続き、「まつりによる大クラスター」というニュースは流れなかった。街中でのイベントは中止であったが、屋台の引き回しは町内で許されたため、お囃子も笛を吹く人は屋台の外で吹くなどの工夫しながらも行うことができた。千歳町では、お初は一件のみ行い、他は辞退したようである。接待もなく、初凧は掛け声のないお祝いができた。2021 年と違い、ラッパ隊は凧場で許された。一般参加を無しにしたが、光栄なことに役員会の特例で筆者と話者のオーストラリア人・アメリカ人だけの参加が認められ、「外人部隊」の参加は 3 名のみであった。最低限のことができたため、伝承の危機を一時的に逃すことができた。しかし、2023 年以降のまつりの形体は不明であり、根本的な伝承問題が残っている。千歳町にとっては今後の課題が山積みにある。

10)　令和 4 年度浜松まつりについて〈ご案内〉https://hamamatsu-daisuki.net/matsuri/news/2022/03/40325.html（2022. 03. 25）

5　研究の今後の課題

この研究は「コロナ渦」という一時的な現象を対象とした。伝承プロセスの動画の中の静止画にしかないとは言え、かなりショッキングな写真を撮ることができた。しかし、上述のように、千歳町にとってまつりの伝承問題が山積みであると同様、この研究の今後の課題も山積みである。どのように伝承してきたこと、そしてどのように今後伝承していくかについては引き続き研究する必要がある。2021 年 8 月に聞き書きを行なった 9 名の話者とは 2022 年のまつりに参加した際、ついに対面で再会ができ、今後引き続き聞き書きを行う予定である。そして、これ以外にまだ聞き書きができていない役員や一般参加の千歳町の関係者、あるいは場合により多町の方々との聞き書きを行う予定もある。

終わりに

長い歴史を持つ浜松まつりという端午の節句の過ごし方は日本での他の都市まつりや凧揚げ大会と共通点を持ちつつ、独特な存在である。この伝統を守るにはコロナ禍の打撃を与えられる前にも問題点が多かった。都市化・娯楽離れ・観光化・少子高齢化をはじめとする様々な観点から浜松市民が危機感を抱いていた。震災の一時中止後にはすぐに元に戻ることができ、翌年に盛り上がりを見せた。しかし、コロナ渦の影響により、伝承問題だけではなく、まつりのあり方そのものの危機であることは過言ではない。試行錯誤により、組織委員会とそれぞれの町の凧揚げ会がどのようにその伝統を継承していく、まつりを行うかというのは大変興味深い時期である。この浜松まつりを見ることにより、日本または世界全体の現代の民

俗学にとって重要な様々なテーマについて理解を深めることができる。浜松市民が誇りに思っているこのまつりは、独特であると同時に、日本民俗の様々な風習を併せ持つ代表的なまつりでもある。今後ともこの論文で触れた様々な現象による浜松まつりの持続と変容の中で、どのように浜松の市民がこのまつりを次世代へ継承していくかを課題として、歴史民俗を合わせた「歴民学」という観点から研究を続けたいと思っている。

〈参考文献〉

荒川章二・笹原恵・山道太郎・山道佳子、2006 年、『浜松まつり―学際的分析と比較の視点から―』、岩田書院

公益財団法人浜松観光コンベンションビューロー（現：公益財団法人 浜松・浜名湖ツーリズムビューロー）による統計資料（未発行）

菅田正昭、2007 年、『日本の祭り―知れば知るほど―』実業之に本社

日本凧の会（編）、2019 年、「全国凧揚げ大会日程」、『日本凧の会会報第 98 号 WINTER 2019』、日本の凧の会

浜松観光コンベンション課（編）、1996 年、『浜松まつり』、浜松観光コンベンション課

浜松市役所（編）、1971 年、「浜松の凧揚げ」、『浜松市史　通史編』第二巻、臨川書店

浜松まつり組織委員会（編）『2012 年浜松まつり公式ガイドブック』、浜松まつり組織委員会

浜松まつり組織委員会（編）『2019 年浜松まつり公式ガイドブック』、浜松まつり組織委員会

浜松まつり組織委員会、浜松まつり：浜松まつり公式ウェブサイト（https://hamamatsu-daisuki.net/matsuri/）、浜松まつり組織委員会

松尾良一、1997 年、「浜松市―外国人混住社会から共生社会への道程」、駒井洋・渡戸一郎（編）『自治体の外国人政策―内なる国際化への取り組み』明石書店

山崎源一、1983 年、『凧と屋台』、樹林舎

山田有一、2007 年、『動 粋 静 浜松まつり』樹林舎

八幡和郎、西村正裕、2006 年、『「日本の祭り」はここを見る』祥伝社

Hiroyuki Osawa, John Bester（trans.）, 1999, *The Great Festivals of Japan: Spectacle and Spirit*, Kodansha.